# ユスト高山右近帰天400周年
# 記念シンポジウム

# 講　演　集

― ユスト高山右近の信仰を育んだ霊操 ―

2015年6月21日 東京

日本カトリック司教協議会列聖推進委員会
カトリック大阪大司教区
上智大学神学部
カトリックイエズス会日本管区

目　次

前書き …… 1
日本カトリック司教協議会列聖推進委員会委員長　大塚喜直

講演集

基調講演
現代の教会と社会に対する右近の殉教の使信の重要性 …… 2

Dr.Prof. Anton Witwer SJ
教皇庁立グレゴリアーナ大学教授
ユスト高山右近列聖申請代理人

高山右近と霊操
―高山右近とイグナチオ・デ･ロヨラの霊操の精神― …… 14

川中　仁
上智大学神学部教授・副学長

キリシタン時代の霊性 …… 23

溝部　脩
カトリック高松教区名誉司教、前列聖列福特別委員会委員長

日時：2015年6月21日（日）14：00～17：15
場所：上智大学2号館17階国際会議場
主催：日本カトリック司教協議会列聖推進委員会
共催：上智大学神学部、上智大学カトリックセンター、
カトリック大阪大司教区、カトリックイエズス会日本管区

# 前書き

日本の教会は、キリシタン時代その生涯によって、イエス・キリストへの信仰を証ししたユスト高山右近の列福を願い、その早期実現を求める祈りを続けて参りました。神は、その祈りを聞き入れてくださり、2016年1月22日に、教皇フランシスコが、右近の列福を正式に承認してくださったとの発表を聞くことができました。これは大きな喜びです。わたしたちは右近の生き方の神髄を理解するよう招かれています。右近は、その祈りによって、清められ、深められ、研ぎ澄まされ、そして殉教による愛のあかしを実現しました。信仰のわざは、祈りのみのりです。祈りが深まれば、信仰もおのずと深まります。祈りは信仰、信仰は祈り、だとすれば、わたしたちは、右近の祈りに必ず目を向けなければ、右近の生き方の神髄を理解することはできません。

右近の祈りの特徴は、「霊操」にあると言われます。霊操とは、キリシタン時代、イグナチオの霊操を基本とした、指導的な信徒の養成に盛んに活用された祈りの手引きです。右近の霊性を理解するために、右近にとって、イグナチオの霊性はどのような価値があったか、そして、その中で右近が、どのように霊的に成長していったかを知ることは、たいへん有意義なことです。

そこで、日本カトリック列聖推進委員会は、2015年6月に、ローマから右近の列聖申請の代理人であるアントン ヴィトヴェル（Anton Witwer、イエズス会司祭）教授らをお招きして、右近の信仰と右近を育んだ霊操をテーマに、東京と大阪でシンポジウムを開催いたしました。今回、ここにお届けする小冊子は、東京のシンポジウムを紹介するものです。

ヴィトヴェル教授は、霊操に育まれた右近の生涯とその殉教の独自性を明らかにしてくださいました。上智大学の川中仁教授は、霊操の概要を適切かつ分かりやすく概説しています。当委員会の前委員長である溝部脩司教は、キリシタンが霊操を精神的な支柱にしていた様子を解明してくださっています。

どうぞ、この小冊子をお読みになり、右近の生涯が祈りによってどのように深められ、殉教への道を歩んでいったかを黙想してください。

2016年2月3日 ユスト高山右近の帰天の記念日に

日本カトリック司教協議会
列聖推進委員会
委員長 大塚喜直 京都司教

# ユスト高山右近帰天400周年記念シンポジウム
# 基調講演

東京　上智大学2号館17階国際会議場
2015年6月21日　14：00 〜 17：15
大阪　カトリック梅田教会サクラファミリア
2015年6月24日　18：00 〜 20：45

---

## 現代の教会と社会に対する
## 右近の殉教の使信の重要性

**Dr. Prof. Anton Witwer SJ**
教皇庁立グレゴリアーナ大学教授
ユスト高山右近列聖申請代理人

**序**

殉教は、十字架につけられ復活した主への信仰を最高にあかします。それは救いの神への生きた希望の表れ、神と隣人のために生きる愛の表れです。また殉教は、雄々しくいきいきとした神聖な徳のあかしでもあります。第二バチカン公会議は、各自の立場で聖性と完徳を目指すすべてのキリスト信者の召命という文脈の中で殉教を語っています。教会憲章は、それを「卓越した賜物であり、愛の最上のあかし」と明言しています。「したがって、弟子が、世の救いのために進んで死を受けた師に似た者となり、血を流して師の姿にあやかる者となる殉教を、教会は優れた賜物、愛の最大の証明と考えている。この賜物は、わずかな者にしか与えられないが、すべての人は、キリストを人びとの前で証言し、教会にけっして欠けることのない迫害の中にあって十字架の道を辿るキリストに従う覚悟がなければならない」。(1) さらに進んで「自分の血を流して信仰と愛の最高のあかしを立てた使徒とキリストの殉教者たちが、キリストにおいてわれわれに固く結ばれていることをつねに信じ、聖なる処女マリアおよび諸天使と同じように、彼らを特別な愛情をもって敬い、彼らの執り成しを信心深く祈り求めてきた」。(2)

では、ユスト高山右近の殉教の「卓越した賜物、最高の愛のあかし」とは、何に依拠しているのでしょうか。今日、「人びとに向かってキリストをあかしさせ、十字架の道において主に従わせる」模範が、どのように私たちを刺激するか、なぜ右近の「信仰と愛のあかし」が、「右近の執り成しの助けを嘆願するよう招くのか。これらの問いは、教会と現代社会への右近の使信の重要性を省察するよう私たちを動かすはずです。

右近が残した殉教の使信について論じることは、ことのほか大切です。なぜなら右近の生涯を知り、右近が示した信仰と殉教を理解することなしに、現代に生きる人びとに大きな影響を与えること、すな

わち、日本の教会と社会に際立った意義をもたらすことは不可能です。聖人たちは、ただ人びとの記憶に留められている範囲で「人びとの信仰の中に生き、存在」します。―その「模範」が尊敬され、必要に応じて「執り成す人びと」として呼び求められます。

右近の帰天から400年が経過しました。その間、右近が記憶され敬われたのは、たんに殉教者としてだけではありません。キリストへの信仰の偉大なあかし人として記憶され敬われてきました。それは、イエズス会の宣教をとおして右近にもたらされました。右近の生涯と死は、日本の教会にとって、とくに重要であったし、今も重要なのです。また右近の生涯と死は、遠い過去において教会の成長のために必須であったし、さらにその信仰のあかしは、今の時代にとって重要です。キリストの信仰を生きるすべ、堅固な信仰、死に至るまでの忠実さは、際立った意味をもっています。ユスト高山右近は、16世紀最高の日本人宣教師でした。右近は、外国人宣教師のようにではなく、日本人独特の方法でキリストへの信仰を生き抜きました。―そして自らの生涯と流罪による死をもって、キリストの教えの文化受容を助けました。

私たちが記憶に留めておくべきことがあります。右近の生涯と死は、400年前、マニラで右近の帰天の知らせが引き起こしたときと同じ感慨を日本の人びとの間に引き起こすことができるということです。キリスト者は､「この聖人」が死に､その模範が取り去られることを信じることができませんでした。右近の深い信仰は、人びとの中に生き続けました。人びとは「この聖人」と生きた信仰体験を互いに分かち合いました。[3]

## 基礎―日本に告げ知らされた信仰

右近の信仰の成長と、それを特徴づける背景をよりよく理解するには、キリストへの信仰がどのように日本に伝来し、人びとに受け入れられたかを思い起こすことが有益です。 16世紀におけるキリストへの信仰の成長、そしてまた信仰の拒絶と迫害は、信仰の受取られかたに帰すはずだからです。

1549年4月、フランシスコ・ザビエルは日本に向けてインドを離れました。2人の同僚会員と、ゴアのイエズス会の大学で勉強していた3人の日本人キリスト信者が同行しました。この信者たちは、要理を学んだ後、受洗し、霊操を体験してから、主の手の中にある道具となることを望み、公言したのです。[4] フランシスコ・ザビエルはこれらの人びとと日本への福音宣教の仕事を始めました。ザビエルは、1551年11月16日まで日本に滞在しました。[5]

ザビエルは、この使命が神の導きであると感じました。そこでザビエルは、キリストへの信仰が日本人に受け入れられるとの大きな希望に満たされました。[6] ザビエルは、1549年8月15日に日本に到着した後、人びとが福音を知る望みを抱いているとの確信をいっそう強め、神への希望にすがりました。[7] キリストへの信仰を説明できる司祭を送るようにとの願いと、3人の日本人キリスト信者との体験は、いまだにイエス・キリストを知らず闇の中にいる人びとへの思いと愛を抱くフランシスコ・ザビエルのこころを表しています。[8] ザビエルは、問題を生み出すもの、日本人を躓かせるすべてから、愛によって遠ざかりました。[9]

日本に到着して、ザビエルは、日本人の特質をいっそう明確に理解しました。まったくどうでもよい特徴や、さして重要でないことがらにかまけてはいません。それらの特質の大部分は、道徳的・霊的な価値に関わっています。それらは、キリストへの信仰の生き方を強く左右するだけではありません。キリスト者でない人びとによる信仰の受容という結果にも強く作用するものです。[10]

自分の名誉を他の人びとの前で守る熱意は、彼らに他の価値を放棄し相対化することを可能にさせ、こうして、苦行と厳格な生活をいっそう望ませます。その上、これは良い社会秩序と相互の尊敬を保証します。すなわち日本人同士の関係は安定し、畏敬の念に根ざした大変深い信頼に特徴づけられます。貴族や地の支配者への深い尊敬により、人びとは、仕える相手への献身的な奉仕と無条件の忠誠を喜んで実行します。名誉のために、人びとは自身を捧げ、いわゆる自殺さえいといません。(11)

「善意そのものの民」であり、すべてにおいて妥協なしに仕えようとする日本人が、福音にこころを開き、イエス・キリストを自分たちの主であると認めるなら、次のことをたやすく理解するでしょう。この決意は、日常生活で頼りにし、緊密に結ばれた主君と家臣との関係に深刻な緊張と誤解、大きな困難を生みます。それに続き、キリスト者は、尋問と裁判に直面しました。同時にキリスト者ではない人びとは、すぐに不快に感じ、自分たちが十分に尊敬されていないとの印象をもち、失望さえしました。これは強い暴力的な反応を引き起こしました。たとえばそれは、キリストを最高の主と仰ごうと決意した人びとへの迫害につながりました。

この文脈の中で、迫害に対する姿勢に関係する他の要因に言及する必要があります。日本では、多くのキリスト者の殉教の具体的な形を決定づけました。それは十字架刑です。受難と十字架、それはイグナチオの指導のもとで、フランシスコ・ザビエルがパリで霊操した時からの中心的な関心事でした。しかしザビエルが宣教の生活を経験した後、イエスの受難と死は、より重要で特別な意味をもつようになりました。

フランシスコ・ザビエルは、暴力による死を遂げませんでしたが、内的な「殉教」の苦しみを味わいました。酷い待遇を受ける人びと、不正義の餌食になり、それらの振る舞いに対してなすすべもない状態に置かれた人びとを見た時です。そこでザビエルは、自分の深い傷として殉教を引き受けることを肯定しました。(12) 他者に対するザビエルの共感と十字架上の主への愛は、彼を殉教者にしました。ザビエルは、「殉教の望み」を抱いてインドから日本に発ちました。主における同士たちに、はっきり書き送っているとおりです。(13) その同じ望みは、右近の中に息づいています。

ザビエルは、福音を述べ伝えるために殉教者がきわめて重要であると強く確信し、十字架上のイエスに従う道である殉教への熱意をこめて、種子島について語っています。それは、モルッカ諸島からシモン・ロドリゲスに宛てた1549年2月12日付けの書簡で強調しています。(14)

ザビエルの説教の核心は、日本人の精神的な情感と調和しています。ザビエルを日本に連れてきた3人の日本人は、とくに十字架の観想において、霊的な慰めを得ようとしました。(15) 端的に言えば、次のことは確かであります。霊操と十字架上のキリストに従う霊性によって育成された最初のイエズス会員の説教であれ、日本人に福音を受け入させた霊であれ、双方とも、主の受難の中にキリストへの信仰の本質を認識させることに寄与しました。それは、十字架における神の憐れみに満ちた愛と購いの認識です。「わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです」(一コリント1.23-24)。

キリストの十字架をまさにキリストの教えの本質とすることは、フランシスコ・ザビエルによる福音宣教開始直後に、日本のキリスト者の数が急速に増した主な原因になりましたが、それだけではありません。このような特質は、キリスト者でない者の目には「つまずき」である十字架を中心に据える理由

でもあります。信者は十字架により、その十字架をキリスト者への迫害の愛すべきしるしに変えました。[16]

## 右近の信仰の卓越しためぐみ

右近が自分の生涯を導いた信仰と価値に、どのように気づいたかを知ることなしに、迫害に直面したユスト高山右近の姿勢を深い水準で理解することはできません。人生のさまざまな状況で意思を決定し具体的な行動を決める動機は、その人の養成と人生経験、信仰の光のもとで自分の生涯を理解し解釈する仕方に左右されます。そこで次のことを簡潔に思い起こすことが役立ちます。右近の生涯を条件付けたことがら、幼少期からの姿勢、キリスト者として成熟させたかずかずの体験です。

右近は、1563年に受洗してキリスト者になりました。しかし青年期に、右近は真のキリスト者とは程遠い人間でした。右近は、キリストへの信仰特有の養成を受けませんでした。右近の信仰は親に倣うものでした。彼の日常は、その時代の精神に支配されていました。すなわち戦いを中心とし、権力と力を基礎とした精神性です。このような精神に満ちて、1573年の戦いで右近は和田惟長を打ち負かしました。惟長は、一週間ほどで負傷のために逝去します。

右近も、その戦いで負傷し病床にありました。回復を待つ時間は、右近にとって人生の深い意味を省察し、人生の転機をもたらす時期になりました。この強烈な体験の時期は、イエズス会の宣教方法の戦略的な転換の時期と重なります。それまで仏教の教えへの対抗と護教的な色合いが強かった要理教授は、イエス・キリストを宣べ伝えるものへと変わったのです。

1574年、右近は高槻で、フランシスコ・カブラル師の要理教育に魅了され、福音の使信に包まれました。救い主が人間に自分を与え尽くしたことを悟ったとき、右近の信仰と姿勢は変えられました。これは右近の最初の回心であり、右近を「宣教者」、イエス・キリストの宣布者、日本のもっとも偉大な福音の推進者にしました。

荒木村重が織田信長に謀反を起こした時、右近の信仰は試練を受けます。右近は、二人のどちらに忠誠を尽くすか、葛藤に陥ります。村重につかなければ、人質に取られている妹と長男の命はない。信長について高槻の城を明け渡さなければ、信長は教会を破壊し司祭を迫害すると脅す。右近は、決定を下す前に祈り、ある行動を決めます。それは、武人としては想像を超えるものでした。戦いに手を染めず、流血の事態を最小限に留める最良の手立てを講じたのです。右近は平和交渉を始めました。右近は武器を捨て、信長の前に出ました。そのとき、右近は、自分自身を神に完全に委ねきりました。神は、村重や信長よりも上のかたです。[17]

直面した葛藤を自覚し、自身を助けることさえできない体験をとおして、右近は神への信頼の力を増す機会を得ました。この気づきによって、右近は、自分の地位と名誉、いのちさえ捨てることが可能になりました。右近は、死を厭わない英雄として戦うことをつねとする人間から、自己を他者に捧げ、イエス・キリストの模範に倣うことができる愛の人に変貌しました。

この二度目の回心のおかげで、ユスト高山右近は「宣教者」になりました。右近は、たんに外面的なことばと行為だけでなく、その霊名「ユスト」（正しい）に誉れを帰すような生活の振る舞いによって証明するすべを知っていました。右近の「あかし」の動機に対して、善意の人びとは、キリストの教えを「右近の法」と呼びました。

右近の信仰を特徴づけるものは、イエス・キリストの受難と十字架を自分のものとすることです。右近にとって、十字架は、キリスト者を他の人びとと区別するしるしにすぎないものではありません。十字架は彼の慰めであり、祈りへの励ましでした。十字架は、彼の信仰を本物にする道です。十字架は、信仰への忠実さにおいてイエスに従うすべです。

信仰の歩みと何年かの経験は、一歩一歩、主の望みなら自分の生涯を捧げるキリスト者の望みへと右近を引き込みました。こうした自己奉献への力は、右近が希望を置いた神からのものです。

こうして右近は、愛とゆるしのこころをもって、困難と度重なる迫害の苦しみに直面する「準備ができていた」だけではありません。神が導いたであろう状況をとおして「キリスト者」になるように神の養成に身を任せました。右近は、自分を神の手に委ねることにより、神への信仰を深めました。右近は、このように成長しながら、「殉教者」ということばの元の意味どおり「あかし人」になりました。それは、十字架上の主への信仰のために自己のいのちを捧げることを望むあかしです。その主は、自分を十字架に釘付けにした、まさにその人びとのために血を流したかたです。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」（使徒7.60）と祈った聖ステファノと同じように祈るあかしです。

## 右近の最後のあかしである迫害

秀吉による迫害は、1587年7月に始まりました。右近は、何の警告もなしに、夜、突然、追放されたのです。この機会にユスト高山右近は、揺るがない信仰のあかしを立てました。最初の大きな迫害の間、非常に堅固な信仰は、右近の基本的な姿勢を際立たせました。

右近のキリスト信仰は、きわめて成熟したものでした。というのは、右近は、救い主を信頼しきることができるほど主の愛を体験したからです。しかし右近はまた、自分の意思、自分の決意をも確信していました。すなわち、人間的な能力と力です。右近は、自己の状況の中で、あらゆる手段を尽くしてイエス・キリストを守る戦いの方法を知っており、その準備ができ、またそう望む「キリストの武人」でした。にも関わらず、右近は内的には、まだ武人でした。自分の生涯と宗教を長く考察し振り返った後、右近は、イエス・キリストとへの信仰とその本質的な真理に関する深い気づきに至りました。キリスト信仰が真の宗教であると認めたのです。右近は、自分なりの仕方で、それがキリストの教えの真理であると確信して、友人に紹介しました。この説得の力により、多くの人びとが受洗しました。

右近の深い宗教性と神に対する基本的な信頼には疑問の余地がありません。しかし右近の生涯におけるこの段階で、その信仰は、多くはまだ自己の力の範囲内での知識、判断、決定、自信に限られていたことを認めざるを得ません。彼は、自身の信仰が強いと感じていました。それはルカ福音書に記されたペトロのようです。「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」（ルカ22.33）。これは、迫害全体における右近の行動を見れば明らかです。

右近は、追放されることを知りました。右近がその知らせを受けた後、権力者たちの前に示した態度は、あるがままの自分がどのようであるか、でした。右近は、敵対する人びとから逃げませんでした。その逆です。敵対者に勝つために対峙しようとしました。福音に信頼しようとしたのです。どのような妥協もせず、迫害する者たちの前で、自分のキリストへの信仰をあかししたいと熱望しました。こうすることで右近は「イエス・キリストの騎士」である名誉を守りとおしました。

右近の決意は、キリスト信者でない多くの友人たちの心配の元になりました。友人らは、秀吉をなだめるために、あまりにも堅い答えの語気を改めるよう右近を落ち着かせ説き伏せようと試みました。し

かし右近は彼らに言います。神に関することは、一点たりとも曲げるべきでないと。自分は、決してキリスト者であることを捨てないと秀吉に繰り返し述べ、信仰に対する自分の忠実さをあかししました。このとき右近は、キリストへの愛のために殉教を受け入れる準備ができたという霊的な力と慰めを体験しました。

しかしながら、自己の信仰に忠実に生きた右近は、たんに自分自身のことや自己のあかしの信頼性について考えただけではありません。他の人びとが信仰に堅く立ち、よいキリスト者であり続けるよう願いました。右近が望んでいたことは、神の名誉と栄光のために自分の信仰を明らかにすることでした。イエス・キリストへの信仰のために自分のいのちを捧げる準備ができていることを示すしるしは、髪を下ろすことでした。これは、死や追放などの憂き目にあった時、日本人の間でしきたりになっていました。右近の家臣らは、追放を受け入れる主君の決心に従う意思を表示し、右近に従うことを望んでいました。家臣らは、主君と運命をともにすることを望みました。

右近一人が迫害の中で自分の信仰をあかししたわけではありません。右近は、自分の家臣との連帯を体験しました。このことは堅固な信仰に生きる右近の慰めでした。右近は、自分がイエス・キリストのために苦しむに値すると感じました。同じように右近の追放は、父ダリオにとっても喜びと感謝の理由になりました。これはダリオ自身がイエズス会員に告白したことです。家臣の連帯と父の誇りは、守るべき名誉に関係します。右近はまた、彼の名誉を守った他のキリスト者からも慰められました。このことは、右近が真に信仰深い「義の人」と評価されていたことを示しています。そこでこの慰めは、大いなる堅固さと強さをもって迫害者、とくに秀吉に対峙して進んでいく右近にとっては、激励でした。

自己の名誉の保全に根ざす右近の無条件の信頼をとおして、神は右近の殉教への望みを増したり、追放され地位と財産の没収を受け入れるよう助けたりしながら、右近を殉教へと整えました。

1587年の迫害に対する右近の姿勢をよりよく理解するために、ひとつの側面をさらに考察することは有益です。右近が体験した愛と連帯に対する感謝です。その感謝のこころは誠実で明白です。事実、少なくとも無意識のうちに、右近は、すでにキリスト者の共同体とその慰め、信仰における励ましが必要であることを感じていました。右近は､自分の必要とすることを深い仕方で認識し告白する段階からは、いまだに遠かったのです。右近は、むしろ他者に十分頼らない立場を貫き、独立の姿勢を保ち、信仰を自分の能力に基礎を置く姿勢を取り続けていました。

ですから右近は、隣人を助ける能力はありましたが、どのように助けられるかを学ぶ必要がありました。右近は、自分自身の無力さと人間的な欠如を体験しないかぎり、真の信頼心を醸成することは困難でした。なぜなら自分に中心を据え続けていたからです。言い換えれば、右近はその時、ペトロと同じ困難を抱えていました。主のために「牢に入っても死んでもよい」と言って主への無条件の信頼を声高に言い表した時の困難さです。右近は､「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカ22.31-34参照）と主が祈ったような自己の弱さと深い欠如に気づく段階にいませんでした。右近は、主が自分の足を洗うがままにする心構えがない使徒でした（ヨハネ13.6-8参照）。

迫害時の固い決意と堅固な信仰にも関わらず、右近の霊的な旅には、足りないものが、まだたくさんありました。ペトロがそうであったように、右近もまた、主が導くべき人生の中でイエス・キリストによって作り変えられ、生まれ変わる必要がありました。神は、右近が次のことにゆっくりと少しずつ気づき認識するよう計らいました。人間の決意は、誠実で崇高で寛大であるとしても、殉教は人間の決意ではなく、めぐみであるということを。

秀吉の命令と右近の追放のすぐ後、右近は、地位と財産の没収を寛大なこころで喜んで受け入れる素晴らしさを見せました。右近は、貧しく質素な生活に追いやられ、小豆島に隠棲せねばなりませんでした。右近は、それでも幸福であり、こうした境遇に満足でした。右近は、他の人びとに近づくことができ、イエス・キリストへの愛のために死ぬ決意にある人びとを励ましました。[18]

流罪への断罪と世から退く右近の決断は、右近を変え、人びととの関係を変えたようです。右近は「巡礼者」になりました。すなわち、神に信頼を置き、その助けを求める人です。右近は、かつての家臣の友になったのです。貧しさの体験から、いかに多くを神やたくさんの人びとからいただいてきたかを学ぶようになりました。こうして、こころの中に感謝の念が増しました。最初の大きな迫害の間に学んだことは、そこから回復した後も右近の中に残りました。[19] すなわち、右近は、他の助けに自分を委ねることができ、施しを受ける姿勢を見せました。そして受けたものを他者への奉仕―教会への奉仕に供しました。[20]

右近は、イエズス会員と親密で深い関係にあり、多くの人びとをキリストへの信仰に導く仕事でイエズス会員と協力しました。これによって右近は、信仰に関する自身の知識と経験をいっそう深めました。[21] こうして右近の神への信頼は増しました。秀吉が司祭たちを殺すよう命じたと知った時、右近はそれを歓迎するほどでした。自分の行動が、自身の殉教を引き起こすことに思いをいたしていたことを明らかにしたすぐ後でさえ、右近は、神がそれを許したのであり、それを神のめぐみと見たのです。[22]

右近は、自分の信仰のあかしを深めることができればと思った「行動的な殉教」をまだ夢見ていたことに気づかされました。右近は、それが十字架上の死であっても「英雄的な死」を切望しました。イエス・キリストの死に倣うことだからです。右近は確かに「自分のいのちを捧げること」を望んでいました。しかし、そのときはまだ、より深い方法での「自己否定」、すなわち「自分の行動に死ぬこと」を問われ得ることを想像できませんでした。

## 服従への旅―殉教をめぐみと受け止める―

1614年、故郷を追われ、マニラへの追放の苦しい旅は、右近にとってめぐみでした。なぜなら、右近は、それによって信仰を深め、霊的な人に向かって成熟し、十字架についた主をあかしする思いに駆られたからです。すべての苦しみと困難にも関わらず、右近の最後の年は、右近を決定的に「真の殉教者」に変え、こうして日本の殉教者として尊敬を集めています。ヨハネス・ラウレス師は「右近は真の殉教者であった」（Iustus Takayama Ukon erat verus Martyr）と述べています。[23]

神は右近に殉教者になること、イエス・キリストの真のあかしびとになる深い望みを起こさせ、右近を成長させました。右近は旅の始めに、ペトロの理解同様、殉教を理解しました（ルカ22.33）。それは自分のいのちを英雄的に主に捧げることであり、瞬時または短時間にいのちを終わらせることでした。右近は、まだ殉教の意味を学ばねばなりませんでした。すなわち殉教は、たとえば切腹のような、暴力的な死を招くものを意味しないということです。右近は、殉教がたんに人間の決意のみのりであるという考えさえもっていました。

右近の姿勢を分析するには、以下のことを区別する必要があります。できるかぎり真実な意味でキリストをあかしする「殉教への望み」と、可能なすべての手段を用いて殉教に至らせる行為です。なぜなら人間の行為ではなく、神の行いだけが、死を真の「神のあかし」に変えることができるからです。それでも次のことを念頭に置かねばなりません。殉教は、犠牲者のような暴力的な死の苦しみである純粋

な受動性を意味するものではないということです。反対に、殉教において、神の意思に対する人間の応答は、最期の瞬間まで現れます。人間のこの応答だけによって、その死は真の「信仰のあかし」、すなわち「殉教」であり得るのです。

このようなわけで、右近の「殉教への望み」の意思表示を考察するだけでは不十分です。むしろ神に対する応答、とくに最後の数か月の生き方を省察すべきでしょう。そこに右近の信仰がはっきり現れます。それにも増して、右近のその「応答」は、その信仰の歩みに反映され、神が右近をどのように段階的に「より優れた殉教」へと準備したかを明らかにします。自分の能力や行為に根ざす誤った自信から右近を解放し、神への愛を実感させる方法です。右近は、より大いなる神の栄光以外の「なにもの」をも望むまいと決心しました。右近は、自分の信仰生活全体、とくに迫害という状況を、「選び」すなわち「識別」と「決定」として生きました。迫害の間、右近は、イグナチオの霊操が何であるかを実感させる旅路を歩みました。霊操が次のように教えるとおりです。「人は誰しも自愛心、我意、利己心から離れれば離れるほど、霊的なことがらにおいて進歩すると考えるべきである」(24)

ペドロ・モレホン師は、右近の三重の試練に言及しながら、その成長の過程を記しています。自分のいのちを他者のために捧げる堅い決心は、荒木村重が信長に反旗を翻した、いわゆる「信仰の最初の試練」（Prima Provatio Fidei）において，すでに存在していました。モレホン師は、この文脈の中で右近は「潔白な状態で死に赴いた」と断言しています。モレホン師によれば、右近は、信長に呼ばれたとき、つぎのように言いました。自分は、信長殿に仕えるために行くのではない、死ぬか、神父たちとともに追放されるか、です。その時、神は、すでに右近を試練に入れることを望んでおられました。それは、右近が自分のいのちを他者に捧げる道に導くためだったのです。

秀吉が追放を命じた第3の試練の時、右近は、それを喜んで受け入れました。右近は、霊操と総告白をして殉教に備えようと司祭を探しました。右近が北国で追放の身にあった26年の間、右近のあかしを「福音の種」とすることを決めたのは、主ご自身でした。イエス・キリストのためにいのちを捨てる覚悟は、キリスト者である友人の中にも息づいていました。その中には、内藤ジョアンとその息子トメがいます。この人びとは、自分の信仰、熱意、そして模範を共有することをつねとし、追放そのもの自体、継続する殉教でした。

追放すなわち流罪は、より優れた殉教です。それは、追放が、モレホン師の言う「継続する殉教」だからというだけではありません。主は、自分を拷問して迫害する者に無抵抗で身を任せました。追放が右近を、十字架上の助けなき主にいっそう深く与らせたからでもあります。追放と流罪において、神は右近の望み、自身のいのちを後のペトロのように捧げたいとの望みを聞きました。だがそれは右近がいだいた殉教像とは非常に異なるものだったのです。

1614年の迫害と流罪（第3の試練）によって、神は右近を養成し続け、完成に導きました。生きるも死ぬも右近自身の手の中にはなく、ご自分の手にあることを、神は教えました。右近は、神だけに自身を完全に委ねるよう招かれ続けました。右近は養成の課程で神とともに働き、その霊的成長の核心としての「応答」をし続けました。右近は再び、内藤ジョアンの息子と一緒に霊操をしました。二人は、信徒というより修道者のように見えるほど一心でした。右近が人間として望んだのは、流罪―自己の殉教―に備えることでした。(25)

マニラへの流罪に発つ前の9か月間、右近は、暴力による死をも視野に入れるであろう殉教への望み

を温めました。日本を離れる前に殺されるであろうと確信し、澄み切ったこころで、そうした死を待ちました。右近は祈りながら、このような死を準備したのです。にも関わらず、右近は、行動的な殉教を求めることを放棄できませんでした。右近は、天皇にすべてにおいて従う用意がありました。しかしキリストへの自己の信仰に関わることについては、天皇に従う意思はありません。右近は、自分の応えを、個人的に天皇に伝えることを望みました。それは、天皇自身によって殺されたいとの望みです。右近は、暴力による死、殉教への強い望みを養いつつ、すべてを放棄する用意ができていました。

神は、ヨブと同じ仕方で右近に試練を与えようとしたように見えます。右近が信仰のあかしを立て、死を前にして自分の信仰と堅忍を示すためです。流罪の地マニラへの船旅は、試練の時でした。この時神は「殉教への積極的な望み」と「ただゆっくりと死へ追いやる状態に受身でさらされること」の違いを教えました。右近は知ったのです。神は、右近がいのちを捧げることを求め続ける。でもそれは即死の形ではない。流罪における「継続する殉教」なのです。これが殉教の神学でいう「追放の苦難による殉教」（martyrium ex aerumnis exilii）です。これは、「より優れた殉教の形」といわれます。他者のためにいのちを捧げるあかしであるだけでなく、十字架に釘付けにされた無力な主に与るからです。(26)

マカオに向けて出帆するかわりに、マニラに行く司祭に同行する決定により、右近は、司祭たちへの大きな評価を示しただけでなく、自身の霊的指導と霊的な慰めの必要を表明しました。右近は、「イエズス会が日ごろ提唱していた霊操」と黙想が可能かどうか問うことで、その意をすでに示唆していました。他者の助けに身を任せることで、自身の人生の決定的な時期が、右近に始まりました。それは、神の手の中の道具になるために自己に死ぬ旅です。このように、右近が神をあかしするよりも、右近をとおして―右近の生涯と同様、死をとおして―神自身があかしすることでした。

「自己否定」の霊的な歩みのおかげで、右近は、いっそう謙遜で、神の手からすべてを受ける受容の人になりました。右近は、以前のように自分のために戦い守ることはせず、担うべきすべてを忍耐と謙遜をもって引き受けました。祈りによって、右近は自身を神に委ね続け、内的に成長する平和を見出しました。また右近は、船上の人びとの間に起こった葛藤に応える平和の道具になりました。右近の謙遜さは、マニラ到着後に与えられた名声によって明らかになりました。それは15年後にマニラで、モレホン師が、殉教の調査の過程で証言したとおりです。右近は、キリスト者として、尊敬してくれる人びとすべてに感謝しました。しかし同時に右近は、自分はそれに値しないと感じており、これに重荷と不安を感じました。

すべての出来事を神からのめぐみと賜物として受け、認識し、自分の力や努力の結果としないよう導いたのは、その謙遜さです。右近は、人生のいろいろな状況を神の意思として歓迎し、内的に受け止めました。主のために苦しみ、キリストへの愛のために自分のいのちを差し出す望みは、愛する者たちを神の摂理に任せ、主から与えられる死でさえも受け入れる準備をさせました。

右近は、息を引き取るまで、神への愛のために自分のいのちを捧げたいとの望みに忠実でした。右近はキリストのあかし人（殉教者）になりたかったし、事実、そうなりました。ユスト高山右近は、その生と死により、その苦しみと困難を捧げて神に栄光を帰したのです。右近は死に至るまで、十字架につけられたイエス・キリストの愛と赦しに生きました。それは、右近において成し遂げられた神のわざでした。フィリピン管区の管区長であったヴァレリオ・デ・レデスマ師は、右近のことばを思い出しなが

ら、次のように書き残しています。「見たでしょうね。私たちが町に入ったとき、総督と他の人びとが皆、私たちが何者かであるかのように礼遇してくれました。それらは、主のわざです。そのみ名に栄光を帰すために主が行ったわざです。私の死後、見てください。それらは、いっそう大きくなるでしょう。主のすべてのわざは、神への愛に向けられているからです。そしてそれは成し遂げられました」。(27)

右近の生涯―その殉教―は、殉教の原型である聖ステファノのように主に自分の霊を委ね、主の名を呼んで閉じられました。ヴァレリーノ・レデスマ師は、これを次のようなことばで確証します。「右近は、その口とこころでイエスとマリアの聖なるみ名を何度も呼びながら、その霊を主に渡しました。享年63歳。キリスト者になって50年でした。彼は、自分が選び取った道に進むことに、決してためらいを感じませんでした。もしも何かを変えたとすれば、それは、善からいっそうよい善へ進むため、信心と、神への愛のために自分のいのちを捧げたいと日々望むため、聖なる掟をあかしするためです。

## 現代の教会と社会の模範と取次ぎ者としての右近

右近は、若いころ、キリストへの信仰を「掟」として、すなわち、信仰は日本の文化と、その時代の伝統にとって異質であり得る何かのように理解して生きていました。―彼は、すぐにキリスト者は愛を生きることであることを悟りました。神の愛によって自己が変えられるままに任せることは、キリスト者の召命です。「神の手の中でその道具」になるには、自分を救い憐れみに満ちた愛をあかしすること、自己を神に捧げることです。(28) 右近は、愛であるキリストへの信仰が、どんな文化にも対立しないことをいっそう明確に示しました。むしろキリストの教えは、文化を豊かにし、それを充実させます。キリストの教えは、その文化が絶対性を主張したり、権力が神の座を自分のものとしたりする場合にだけ、疑問を投げかけます。人は最高の権威である神に従うべきことを、右近はきわめて明確に示しました。ですから右近が、その主君に全幅の恭順を示したとしても、その内面はつねに自由でした。キリスト者の家臣は忠実でしたが、「依存した」のではありません。―そこで、この「自由」は、すべて自分に依存させようとするすべての権威にとって脅威でした。右近はその行動において、キリスト者の自由と愛の模範でした。上述の忠実さに生きることができ、同時に自分が生きる文化と伝統の中で、十分に統合していくことを可能にするものです。

右近の模範は、特別な様式で、迫害とキリストの教えへの敵対という文脈での右近の行動に関係します。すなわち、信仰における右近の堅忍に関係します。1614年の迫害の特徴は、全面的で、全キリスト者を巻き込むものでした。これを逃れるすべは、ただひとつ。キリストへの信仰を棄てることでした。迫害の理由は、キリストへの信仰に対する憎しみであることは明白でした。そしてそれは、キリスト者が、十字架につけられたイエス・キリストに対するあかしができるように導くことになりました。ユスト高山右近の場合、信仰への憎しみは、互いに影響しあい、増大しあっただけではありません。両者とも同じように自己を正当化しあいました。信仰が大きく受け入れられ堅固になる程度に応じて、信仰への憎しみは、それだけ火がつき、増大しました。

黎明期の日本のキリスト教会にとって重要であり、教会を育てるための素晴らしい貢献のために、右近は、1587年の最初の迫害の時から、迫害者の特別の標的でした。その信仰の堅固さは、迫害者を挑発しました。その信仰を捨てさせようとする数知れない試みが実行されました。その努力が功を奏さなかった時、信仰への憎しみは、右近への敵対心を大きくしました。そこで1614年の迫害は、「全体的で」全キリスト者に向けられただけではありません。特別な仕方で右近に向けられました。流罪に断じられた

右近は、信仰への憎悪から起こった迫害の真の「犠牲者」でした。

この文脈において、主のためにいのちを捧げるほどのキリストへの愛をあかしすることに対する右近の信仰とその確かな応需性は、はっきり表れました。迫害は、右近の信仰と、十字架上の主と結ばれたいとの深い望みとをさらに強めたのです。こうして、右近は、キリスト者の生活の模範を他者の前で、期せずして輝かせました。すなわち、迫害は、死に至るまで信じるその信仰により、いっそう適切に右近のあかしを生むことになりました。言い換えれば、神のしもべの「かたちとしての殉教」(martyrium formale ex parte Servi Dei) は、迫害の背景において明確に示されています。すなわち右近が、イエス・キリストへの信仰のために死ぬ準備ができていると示しながら、右近があらゆる瞬間に示した信仰への答えにおいてです。息を引き取るまで、右近は「信仰と愛の最高のあかし」[29] をしました。こうして右近は、従うべき模範になったのです。「人びとの前でキリストについて公言し、迫害の間、十字架の道に従うこと。教会は決してこれを欠かしたことがありません」[30]

マニラへの流罪による右近の死を外面的に一見すれば、それは自然死のように思えるかもしれません。右近が暴力によって死んだかどうか、その事実について疑問が起こります。すなわち、実際的な殉教 (martyrium materiale) についてです。しかし流罪のあらゆる側面を評価すれば、神のしもべが引き受けた苦難、右近をますます弱らせた罠と暴力、それらすべては、右近の死が、確かに苦しみと困難によって引き起こされたことを、確かな道理によって示しています。使用し得る資料は、すべて、右近の死が、迫害の間に行われた暴力によることを認めています。

右近の流罪と死について記述する古い資料の他にも、右近は最初から、「聖なる人」としてだけではなく「殉教者」としても敬われていた事実があります。それらの資料は、キリストのためにいのちを捧げた「聖人」「殉教者」として右近を崇敬することに異論の余地がないと確証しています。右近が、キリストへの信仰を棄てたいと望んだという指摘は、まったくありません。その信仰のあかしは、確信に満ち、決然としていました。その人生は、多くの人を福音に導いたように、「その殉教の血」は、「キリスト信者の種」(semen Christianorum) になりました。―そして右近の殉教は、日本の教会のために果実を生む種になり続けることが期待されています。

しかしながら、右近を「真の殉教者」とみなして、その生涯を、たんに倣うべき人間的模範として観想するに留めるべきではありません。右近の生涯を日本の教会に対する神の愛の表れとして認識することが大切です。神は、右近を道具として使って行動し、右近をとおして私たちにそのめぐみに与るよう働き続けます。右近は、神の手の中で日本人のための最良の道具とみなされ、信徒がその必要に応じて呼び求められるほどの、真の「キリスト信者の種」(semen Christianorum) になることができます。言い換えれば、右近の殉教は、キリスト者が、今日の日本の教会と社会のために「右近の取次ぎの助け」[31] を根気強く願い求める程度に応じて、いっそう重要さを増すでしょう。

[1] Lumen Gentium, no. 42.

[2] Lumen Gentium, no. 50.

[3] Cf. Relación del Provinciale P. Valerio de Ledesma, in: Navas del Valle, Francisco, Catálogo de los Documentos relativos a las Islas Filipinas existentes en el Archivo de Indias de Sevilla, vol. VI, Barcelona 1930.

[4] Cf. Monumenta Xaveriana, vol. I [MHSI 16], Madrid 1899-1900, 531, n. 1; 537, n. 2; 544, n. 2.

[5] Cf. Epistolae S. Francisci Xaverii, vol. II [MHSI 68] Roma 1996, 239, n. 1.

[6] Cf. Monumenta Xaveriana, vol. I, 526, n. 1.

[7] Cf. Monumenta Xaveriana, vol. I, 546, n. 7 (22 giugno 1549); Epistolae S. Francisci Xaverii, vol. II, 148, n. 7 (text of the same letter in Portuguese); 146-147, n. 5.

[8] Cf. Monumenta Xaveriana, vol. I, 532, n. 2.

[9] Cf. Monumenta Xaveriana, vol. I, 549, n. 15.

[10] Cf. Monumenta Xaveriana, vol. I, 579, n. 12-13 (5 novembre 1549).

[11] Cf. Monumenta Xaveriana, vol. I, 579-580, n. 14 (5 novembre 1549).

[12] Cf. Monumenta Xaveriana, vol. I, 316-317, n. 2 (27 marzo 1544).

[13] Cf. Monumenta Xaveriana, vol. I, 415-416, n. 2 (10 maggio 1546).

[14] Cf. Epistolae S. Francisci Xaverii, vol. II, 78, n. 18-19.

[15] Cf. Monumenta Xaveriana, vol. I, 544, n. 3.

[16] Cf. Gordini, Gian Domenico, Paolo Miki, in Bibliotheca Sanctorum, vol. X, 306-308; Frois, Luis – Galdos, Romualdo, Relación del Martirio de los 26 cristianos crucificados en Nangasaqui el 5 febrero de 1597, Roma 1935.

[17] Cf. particularmente la "Relación" del P. Pedro Morejon sulla vita di Justus Takayama Ukon, in Jap. Sin. 46, ff 365-374 (Archivum Historicum Societatis Jesu).

[18] Cf. Litterae P. Organtino (25 novembre 1587), in Cartas que os Padres e Irmãos da Companhia de Iesus escreverão dos Reynos de Iapão & China, Evora 1598, vol. II., 225v-231v.

[19] Cf. Litterae P. Luis Frois (12 ottobre 1590), in Jap. Sin. 50, ff. 97r-130v (Archivum Romanum SJ).

[20] Cf. Litterae P. Luis Frois (1 ottobre 1592), in Jap. Sin.51, ff. 303r-370v (Archivum Romanum SJ).

[21] Cf. Litterae P. Pedro Gomez (13 marzo 1594), in Jap. Sin. 52, ff. 1r-40v (Archivum Romanum SJ).

[22] Cf. Frois, Luis, Relación del Martirio de los 26 Santos Martires, in Jap. Sin. 53, ff 31v-32.

[23] Cf. Laures, Johannes, Justus Takayama Ukon erat verus Martyr, in Missionary Bulletin IV, Tokyo 1952.

[24] Cf. Spiritual Exercises, n. 189.

[25] Cf. Testimonium P. Petri Morejón, in Archiv. Postul. Jap. Beati, vol. VI, ff. 160v-165v.

[26] Cf. Relatio P. Valerii Ledesma, in Philipp. 6-I, ff. 58v-59v (Archivum Romanum SJ).

[27] Cf. Relación del Provinciale P. Valerio de Ledesma, in: Navas del Valle, Francisco, Catálogo de los Documentos relativos a las Islas Filipinas existentes en el Archivo de Indias de Sevilla, vol. VI, Barcelona 1930

[28] Cf. Spiritual Exercises, n. 230-237.

[29] Cf. Lumen gentium, n. 50.

[30] Cf. Lumen gentium, n. 42.

[31] Cf. Lumen gentium, n. 50.

# 高山右近と霊操
## ―高山右近とイグナチオ・デ・ロヨラの霊操の精神―

**川中　仁**
上智大学神学部教授・副学長
Dr. Prof. Hitoshi Kawanaka SJ

### はじめに

右近と霊操というテーマは、今まであまり取り上げられたことはなく、これに注目したのは、恐らく溝部司教様が初めてではないかと思います。今回こうした機会をいただいて、いろいろ勉強させていただくことになり大変感謝しています。今日のお話は、前半15分をイグナチオの霊操とは何かということについて、後半15分で右近と霊操というテーマについてお話させていただきたいと思います。

今回のシンポジウムのポスターやちらしに使われている、西森方昭作の右近像は、大阪のカテドラルにあるもので、世界に四つあります。日本に三つ、あと一つはマニラにあります。今日のもう一人の主役のイグナチオ・デ・ロヨラですが、今日の話のイグナチオ像は、マンレサにあるイグナチオの肖像によく表われているのではないかと思います。

### 1　イグナチオの霊操とは？

では、まずイグナチオの霊操についてお話ししてみたいと思います。霊操について15分程度でお話するというのは実は不可能なんですが、ごく簡単に右近と霊操ということについて考えるうえで大事なポイントだけをおさえてみたいと思います。

まず、霊操の目的ということですが、霊操21番に表題があり、霊操の目的が述べられています。霊操の解釈史には四百年以上の歴史があり、霊操の目的に関しても、霊操の目的は「神との一致」なのか「選定」なのかという議論がされてきました。ですが、実際のところ、「一致」ということには、神との霊的な一致ということだけではなく、具体的生き方の選択ということも含まれていますし、「選定」ということにも、具体的生き方の選択ということだけではなく、神との霊的な一致ということも含まれています。霊操の目的は、「一致」か「選定」のいずれかということではなく、これからみるように、イエス・キリストの姿を味わうことをとおして、生きた人格的他者としてのキリストと出会い、キリストによって自分が変えられていくということだろうと思います。

次に、霊操の基本的構造です。霊操というのは祈りのハンドブックで、一か月間の祈りのコースとなっています。霊操には、一時間の祈り、一日の祈り、一週間の祈りという霊操の構造があって、それが積み重ねられて、一か月間の祈りとなっていて、霊操全体は四週間で、四部から成っています。このうち、第二週から第四週まで、イエス・キリストの生涯がテーマとなっていて、霊操のほとんどがイエス・キリストの姿を味わうことに向けられています。一日の祈りについて、朝から晩まで非常に細かいところまで指示されていますけれども、一時間の祈りを一日4回ないし5回することになっています。また、一時間の祈りは、基本的に「準備」、「本体」、「締めくくり」という構造になっています。後ほどみる、『スピリツアル修行』というキリシタン時代の文献には、これと全く同じ構造がみられます。これは明らかに霊操からとられたものです。

さらに、霊操には、基本的に四つの類型があります。イグナチオや初期イエズス会の時代の霊操の指導書でも、霊操には四つの類型があるとされています。まず、四週間の完全霊操（霊操20番）です。次に、日常霊操（霊操18番）で、社会的な立場などいろいろな事情で、一か月間集中的に祈りの時間をとれない場合、一か月間の祈りを一年くらいのスパンで行うものです。簡易霊操や第一週霊操（霊操18番）というのは、霊操本体に入らせない場合の霊操です。ですから、霊操は実は誰でも安易にやっていいものではありません。ザビエルもイグナチオになかなか霊操をやらせてもらえませんでした。ザビエルはモンマルトルの誓願後にようやく一か月間の霊操が許されています。現在、普通に一か月間の霊操が行われていますけれども、本来は第一週から第二週に入るところで厳しいチェックがあって、第二週に入らせていいのかどうかをきちんと見極めたうえで、第二週に入らせなければなりません。

次に、霊操テキストについてです。霊操テキストは霊操者に渡されることはなく、霊操を与える人が手元に持っていて、霊操者に合わせてふさわしい霊操を与えていました。また、霊操テキストには、「アルケティポス（Arquetipos）」と「アダプタドス（Adaptados）」があります。「アダプタドス」というのは、適用版の霊操テキストです。「アルケティポス」には、「アウトグラフォ（Autógrafo）」というスペイン語の原文テキストと、いくつかのラテン語の翻訳があります。「アウトグラフォ」は自筆稿ということですが、イグナチオ自身が手書きしたものではなく、清書されたものにイグナチオが書き込みをしたために、そう呼ばれています。ただ、スペイン語の原文テキストは、一般に広く出回ることはありませんでした。1548年に教皇に正式に認可されたのは、「ヴルガタ（Vulgata）」というラテン語テキストです。霊操は、イグナチオの時代から二〇世紀に至るまで基本的にラテン語テキストが使われていました。

さて、霊操の基本的方法に入りたいと思いますが、まず霊操の起源についてです。先ほどのヴィトヴェル神父のお話で、右近が大怪我をしてその生涯が大きく変わったとありましたけれども、イグナチオも大怪我をします。それは彼の思い描いていたキャリアデザインがすべて台無しになるほどの大怪我でした。その後の療養中にイグナチオは、『キリスト伝』と『聖人伝』の二冊の本と出会います（自叙伝５番）。『聖人伝』では、聖人たちがキリストの騎士として描かれていますが、イグナチオはそれを読んで、自分もキリストの騎士になろうと思いたちます。彼は地上の王に仕える騎士になるという道で挫折しましたが、新たにキリストに仕える騎士になろうと思ったわけです。この点、イグナチオは右近と似ているところがあります。イグナチオは、負傷をきっかけにして自分自身と向かい合うようになりますが、キリストの姿や聖人たちの姿が描かれている本を味わっているうちに、自分の中に変化が生じ、それで自分が変えられていくということを体験します。彼はその体験を書きとめ、四半世紀間それをあたためて出来あがったものが霊操です。最終的に教皇認可される1548年まで、イグナチオは最後の最後まで手を入れて修正しています。このように、霊操の起源は、非常に具体的なキリストの姿や聖人伝に描かれた聖人たちの姿を味わう、そしてそのことをとおしてキリストと出会い、自分が変えられていくという、イグナチオ自身の体験にあります。ですから、霊操の方法というのは、イグナチオ自身の体験の記録となっています。

次に霊操の方法についてです。霊操2番に「霊操を与える者は、歴史を物語る」とあります。それは、要するに、霊操を提示する人は、霊操する人に具体的な情景、具体的な姿を味わわせるということです。「キリストの姿（Gestalt Christi）」（H・U・フォンバルタザール）ということは、常に神学的インスピレーションの源泉となってきましたが、霊操では、聖書に描かれたキリストの姿を味わい、そのキリストの姿をとおしてキリストと出会います。このようにキリストの姿を味わうときに神との出会いがある

のは、ヨハネ福音書14章9節に「わたしを見た者は、父を見たのだ」とあるように、父なる神が独り子であるキリストにおいてすべてを表されたからです。神との出会いの場となるということが、聖書という書物の非常に大事な特徴です。まさにそこが聖書と普通の書物と決定的に違うところです。神との出会いの場としての聖書ということは、キリスト教の伝統の中でずっと大事にされてきた聖書についての基本的なとらえ方です。

キリストの具体的な姿を味わうとき、神との出会いがあると申し上げましたけれども、これに関連して、霊操15番に重要な表現があります。「神が自らを伝え、霊魂を動かす。」つまり、聖書に描かれたキリストの姿を味わっていくとき、そこに神ご自身がかかわってくるということです。それは、聖書に描かれた具体的なキリストの姿をとおして、神とのコミュニケーションに入っていくということです。コミュニケーションというのは一般的な表現ですが、神ご自身によって自分が変えられていくということが一番大事なポイントだろうと思います。

## 2　右近の霊操体験

さて、後半の右近と霊操というテーマに入ります。右近の霊操体験に関しては、右近の列福調査書がとても助けになりました。また、『スピリツアル修行』というキリシタン時代の書物があります。『スピリツアル修行』は霊操とあまり関係ないとされてきましたけれども、実際のところ内容は霊操そのものです。『スピリツアル修行』では、霊操の方法を非常に丁寧に解き明かしています。これはまさに霊操の「アダプタドス」です。適用テキストですが、この適用レベルは非常に高く、当時のキリシタンの信仰教育のレベルがいかに高かったのかということがよくわかります。ですから、当時のキリシタンたちはただ勢いで殉教していたのではなく、ベースに深い信仰教育があったということは間違いないだろうと思います。それはわたしにとってとても大きな発見でした。いつか霊操と『スピリツアル修行』との比較ができたらと思いますが、両者の祈りの構造は本当にそっくりです。

まず右近の一つ目の霊操体験ですけれども、1587年の秀吉の禁令後、1588年に有家というイエズス会の修練院で右近が霊操を行ったという記録が残っています。「心霊修養」とあるのが霊操ですが、これは実際のところ数日間で、一か月でも八日間でもないので、いわゆる完全霊操ではないのは明らかです。次に、右近のもう一つの霊操体験です。1613年の家康の禁令後、トードス・オス・サントスという修道院（神学院）があったところに、日本各地からキリシタンたちが集められていました。1614年、マニラにいよいよ追放される直前に、右近がそこで「心霊修業」を行ったという記録があります。この記録は最後まで右近と共にいたモレホン神父というイエズス会宣教師によるものです。これも恐らく一か月の完全霊操ではないだろうと思います。完全霊操ではないですけれども、右近は数日間で足りたということかもしれません。つまり、通常は一か月間必要なところを、右近は数日間で済んだということかもしれません。ですから、右近が完全霊操を行ったかどうかというと、恐らくやっていないだろうと思います。あるいは、金沢滞在中に完全霊操を行ったかもしれませんが、これもはっきりわかりません。かといって、第一週霊操という霊操本体に入らせない霊操だったかったというと、そうでもないとだろうと思います。結局のところ、右近のおかれていた状況から、非常に限られた日数の中で霊操を行わざるをえなかったということではないかと思います。

## 3　右近の生涯と霊操の精神

最後に、右近の生涯と霊操の精神ということに入りたいと思います。先ほどのヴィトヴェル神父のお

話にもありましたが、イグナチオと右近はとても似ているところがあります。右近は、当時のイエズス会の宣教師たちから「キリストの騎士」と呼ばれていました。フロイスとかコエリヨ以外の宣教師たちからも、右近はしばしば「キリストの騎士」と呼ばれています。当時のイエズス会の宣教師たちは、右近をそのようにイメージしたのだろうと思います。イグナチオは本物の騎士で、スペインとフランスとの戦いで、スペイン側のパンプローナ城塞の前線指揮官だったときに重傷を負い、騎士としての生涯を諦めます。というか、諦めざるを得ませんでした。そこで彼が活路を見いだしたのがキリストの騎士となることでした。ただ、先ほどのヴィトヴェル神父のお話にもあったように、彼はその時点ですぐに完璧な人間になったわけではありません。まだまだ未成熟でしたけれども、少しずつ少しずつ真の意味でのキリストの騎士へと成長していきます。

イグナチオは、どちらかというと人生享受型だったわけですが（自叙伝1番）、自叙伝に記されているように、イグナチオは負傷して結局騎士としてはやっていけない体になってしまいます。ですが、右近が少しずつ少しずつ真の意味での殉教者になっていったように、イグナチオも少しずつ少しずつ真の意味でのキリストの騎士になっていきました。療養生活の後、彼はたった独りでキリストの騎士となる儀式を行います（自叙伝17番）。その際にイグナチオが祈った聖母マリア像は、当時は近くの小さな聖堂にあったようですが、現在はモンセラートの教会の主祭壇の奥にあります。

右近の生涯にみられる霊操の精神については、ヴィトヴェル神父から非常に詳しいお話があったので、ここでは右近の非常に特徴的な二つの姿だけをみてみたいと思います。まず、棄教を迫る秀吉に対して、右近はこう応えます。「たとえ全世界を与えられても、自分の霊魂の救いと引き換えにすることはしない。」右近は秀吉から棄教か否かという厳しい選択を迫られますが、霊操には、キリストの旗とルシフェルの旗のいずれを選ぶのかという「二つの旗」（霊操136 ～ 148番）という霊操があります。右近は、そんな選択が迫られたとき、迷わずキリストの旗を選び取ります。キリシタンの文献では、秀吉というのは、信じられないくらいの悪党として描かれています。恐らく右近も怖かっただろうと思います。でも、右近は敢然とキリストの旗を選び取ります。

また、コエリョの報告には、秀吉の禁令後、右近が非常に快活だったということが記されています。右近は非常に困難な状況に追い込まれても、決して卑屈になりません。その姿は、「謙遜の三段階」（霊操165 ～ 168番）という霊操を思い起こさせます。「謙遜の第三段階」で、霊操者は、徹底的な貧しさをあえて望み、選び取ります（霊操167番）。ただ、その際に非常に大事なことは、霊操167番の「キリストと共に」という短い言葉にしめされているように、自分だけが頑張ってキリストに従おうとするのではなくて、キリストと共に、キリストの力によって選ばせていただくということです。

イグナチオの霊操で「貧しいキリストに従う」というときにとても大事なのは、精神的な貧しさということから実際の具体的な貧しさに追い込まれるとき、まさにそのときに貧しいキリストに従うことを選ばせてくださいと祈ることです。それは、自分が頑張って、「よし選ぶぞ」というのではなくて、もし神が選んでくださるならば、わたしを選んでくださいという謙遜な祈りです。貧しいキリストに従うということは、わたしは人間わざではないと思っています。それは人間の力で頑張ってできるものではありません。それは、キリストの力によって、キリストに選ばせていただくものです。このようにみてみると、右近の生涯と霊操の精神との親和性は明らかです。ただ、右近の生涯のすべてを霊操だけで説明できるかというと、それは恐らく違うだろうと思います。

## 結び

二コリント12章10節に「わたしは弱いときにこそ強い」とあります。これは、自らのうちにキリストがすべてにおいてすべてとなり、キリストによって自分が全面的に生かされている体験からでてきた、パウロ自身の偽りない言葉です。このように、キリストによって変えられ、キリストによって生かされるとき、外側の何かに頼り、寄りかかる自分ではなく、ありのままの本当の自分が真の意味で生かされることになるのではないかと思います。そのとき、貧しいキリストに従うために貧しいキリストに従うのではなく、自分が本当に自分らしくあること、たとえ貧しい状況にあってもそうでなくても、いかなる状況にあっても揺るがない自己を確立するということではないかと思います。右近を含め、キリシタンたちは別に殉教したくて殉教したということはなかっただろうと思います。彼らもできれば殉教は避けたかったのではないかと思います。しかし、いかなる困難な状況にあっても、右近は、真実の自分をまっすぐ貫き通しました。このような右近の姿に霊操の精神との親和性をみることができるのではないかと思います。

# 高山右近と霊操

## —高山右近とイグナチオ・デ・ロヨラの霊操の精神—

### 1 イグナチオの霊操とは？

### 1・1 霊操の根本

※IGNACIO DE LOYOLA, *Ejercicios Espirituales*, Introducción, texto, notas y vocabulario por CANDIDO DE DALMASES, Santander ²1990.

0) 霊操の基本目的

| 総注 1 (霊操 1・4) | |
|---|---|
| [2] LA PRIMERA ANNOTACIÓN es que por este nombre, **ejercicios espirituales**, se entiende [...], todo modo de preparar y disponer el ánima para quitar de sí todas las afecciones desordenadas [4] y, después de quitadas, para buscar y hallar la voluntad divina en la disposición de su vida para la salud del ánima, se llaman **ejercicios espirituales**. | [2] 総注第一。**霊操**という名称で理解しているのは、[…]、魂を備え、整えるあらゆる方法のことである。それはすべての無秩序な愛着を離れるためであり、[4] また、愛着を離れた後、魂の救いのために自らの生活を整えて、神のみ旨を探し、見いだすためのものであり、それが**霊操**と呼ばれるのである。 |
| **霊操の表題 (霊操 21)** | |
| **Ejercicios espirituales** para vencer a sí mismo y ordenar su vida sin determinarse por afección alguna que desordenada sea | いかなる無秩序な愛着にも決定されることなく、自己自身に打ち克ち、生活を秩序づけるための**霊操** |

1) 霊操の基本構造:「時—日—週 (hora – jornada – semana)」

a) 「週 (mes)」の霊操構造

| 「週 (mes)」の霊操構造 (霊操 4・1–3) | |
|---|---|
| LA CUARTA: Dado que para los ejercicios siguientes se toman **cuatro semanas**, por corresponder a **cuatro partes** en que se dividen los ejercicios; [2] es a saber, a **la primera**, que es la consideración y contemplación de los pecados; **la segunda** es la vida de Cristo nuestro Señor hasta el día de Ramos inclusive; [3] **la tercera** la pasión de Cristo nuestro Señor; **la cuarta** la resurrección y ascensión, poniendo tres modos de orar: | 第四。以下の霊操には、諸霊操が分かれている**四部**に合わせて、**四週間**がとられる。[2] すなわち、**第一部**は罪の考察と観想、**第二部**は枝の主日までを含むわれわれの主キリストの生涯、[3] **第三部**はわれわれの主キリストの受難、**第四部**は復活と昇天、そして祈りの三つの方法である。 |

①第一週:「原理と基礎 (Principio y Fundamento)」、「罪 (pecados)」、「糾明 (Examen)」
②第二週:「王 (El Rey)」、キリストの生涯 (受難まで)、「選定 (Elección)」の準備、「選定 (Elección)」
③第三週:キリストの「受難 (pasión)」
④第四週:キリストの「復活 (resurrección)」、「愛の観想 (Contemplación para alcanzar amor)」

b) 「日 (jornada)」の霊操構造

| 「日 (jornada)」の霊操構造 (霊操 72・2) | |
|---|---|
| Esta repetición de horas, más o menos, siempre entiendo en todas las cuatro semanas, según la edad, dispusición y temperatura ayuda a la persona que se ejercita para hacer **los cinco ejercicios o menos**. | この時間の繰り返しは、多かれ少なかれ、四週間全体で常に考えられているが。年齢、態勢、気質にしたがって、霊操をする者が**五つかそれ以下の霊操**をするのを助ける。 |

c) 「時 (hora)」の霊操構造
ⓐ準備:準備の祈り (oración preparatoria)
ⓑ本体:黙想 (meditación) ／観想 (contemplación)
ⓒ対話:対話 (coloquio)

2) 霊操の基本類型:霊操の「四類型 (quattuor genera)」(※*MI Dir.*, 280–284)

| 「適用 (aplicación)」の原則 (霊操 18・1.3) | |
|---|---|
| LA DÉCIMAOCTAVA. Según la disposición de las personas que quieren tomar ejercicios espirituales, es a saber, según que tienen edad, letras o ingenio, se han de **aplicar** los tales ejercicios; [...] [3] Asimismo, según que se quisieren disponer, se debe de dar a cada uno, porque más se pueda ayudar y aprovechar. | 第十八。霊操を行おうとする人びとの適性、つまり年齢、教養、才能にしたがって、こうした霊操は**適用**されるべきである。[…][3] 同様に、霊操は、霊操者をより助け、役立つように、その取り組もうとするところに応じて一人ひとりに与えられなければならない。 |

①四週霊操:「閉じられた完全霊操 (ejercicios completos cerrados)」(霊操 20)
②日常霊操:「開かれた完全霊操 (ejercicios completos abiertos)」(霊操 19)
③簡易霊操:「簡易霊操 (ejercicios leves)」(霊操 18)
④第一週霊操:「第一週の霊操 (ejercicios de la primera semana)」(霊操 18)

3) 霊操テキスト—原テキストと適用テキスト

| *Arquetipos* (*Textus archetypi*) | | *Adaptados* (*Textus accommodati*) | |
|---|---|---|---|
| スペイン語 | ラテン語 | ラテン語 | スペイン語 |
| *Autographum* (*A*) (1544) | *Versio prima* ($P_1$) (1541)<br>*Versio prima* ($P_2$) (1547)<br>*Versio vulgata* (*V*) (1548) | *Helyar* (*H*) (1535)<br>*Magistri Ioannis* (*I*)<br>*Coloniensis* (*C*) (1543)<br>*Martinensis* (*M*) | *Vallisoletanus* (*L*) |

※*Sancti Ignatii de Loyola Exercitia Spiritualia* (***MI Ex***$^2$), JOSÉ CALVERAS / CANDIDO DE DALMASES, Roma 1969 (*MHSI*, vol. 100 [*MI*, ser. 2, Nova editio: t. 1]).

ⓐ原テキスト:「アルケティポス(*Arquetipos / Textus archetypi*)」(スペイン語、ラテン語)

①自筆稿:「アウトグラフ(*Autógrafo / Autographum*)」(***A***)

②ラテン語訳テキスト:「ヴェルシオ・プリマ(*Versio prima*)」(***P*$_1$ / *P*$_2$**)

③教皇認可のラテン語訳テキスト:「ヴルガタ(*Vulgata*)」(***V***)

※教皇パウロ3世による霊操の認可(1548・07・31)

ⓑ適用テキスト:「アダプタドス(*Adaptados / Textus accommodati*)」(ラテン語訳、スペイン語)

## 1・2 霊操の基本的方法

1) 霊操の起源:イグナチオの霊的体験

a) 霊操成立の基本テキスト(自叙伝 99・2)

| 自叙伝 99・2 | |
|---|---|
| Lui mi disse che gli Essercitii non gli havea fatti tutti in una volta, senonchè alcune cose che lui osservava nell'anima sua, et le trovava utili, gli pareva che potrebbero anche essere utili ad altri, et così le metteva in scritto, [...] | これに答えて、『霊操』は一時に書いたものではなく、霊魂の中を観察し、自分の役に立ったことで、しかも同時に、他人にも役に立つと思われるものを、そのたびに書きつけていったもので、[…] |

b) ロヨラ城の病床での読書(1521)(自叙伝 5–7)

| 自叙伝 5・4 | |
|---|---|
| mas en aquella casa no se halló ninguno de los que él solía leer, y así le dieron un **Vita Christi** y un libro de **la vida de los Santos** en romance. | ところが、その家にはかれが以前読んでいたような本は全然なかったので、**一冊の*キリスト伝***とスペイン語で書かれた**聖人伝**とが与えられた。 |
| **自叙伝 7・1** | |
| todavía nuestro Señor le socorría, haciendo que sucediesen a estos pensamientos otros, que nacían de **las cosas que leía**. | それにもかかわらず、主は**かれの読んでいた書物**を通して、かれが別の考えに移り変わるようにと助けておられた。 |

※「デボチオ・モデルナ(Devotio moderna)」

- 「キリスト伝」:ルドルフ・フォン・ザクセン(Ludolf von Sachsen)(† 1377/78)『キリストの生涯(*Vita Christi*)』
- 「聖人伝」:ヤコポ・ダ・ヴァラッツェ(Jacopo da Varazze)(† 1298)『聖人の華(*Flos Sanctorum*)』

→霊操の起源:「物語テキスト」を媒介とする神とイグナチオとの間のコミュニケーション

2) 霊操の方法

a) 「キリストの姿(Gestalt Christi)」(H・U・フォンバルタザール)

※HANS URS VON BALTHASAR, *Herrlichkeit. Eine theologische Ästhetik*, Bd. 1: *Schau der Gestalt*, Einsiedeln $^2$1961.

| H. U. VON BALTHASAR, *Herrlichkeit* I, p. 445. | |
|---|---|
| Christus aber ist die Form, weil er der Inhalt ist. Das gilt absolut, denn der einzige Sohn des Vaters ist er, […] | だが、キリストは、その内容であるゆえに、そのかたちなのである。それが絶対的にあてはまるのは、御父の独り子だからである。 |

b) 「イエス・キリストの姿」を媒介とする物語的コミュニケーション

| 総注 2(霊操 2・1) | |
|---|---|
| LA SEGUNDA es que la persona que da a otro modo y orden para meditar o comtemplar debe **narrar** fielmente **la historia** de la tal comtemplación o meditación, […] | 第二。黙想や観想する方法と順序を与える者は、その観想か黙想で取り組む歴史を忠実に物語らなければならない。 |

c) 神と霊操者との間のコミュニケーション

| 総注 15(霊操 15・3–4) | |
|---|---|
| [3] tamen, en los tales ejercicios espirituales, más conveniente y mucho mejor es, buscando la divina voluntad, que **el mismo Criador y Señor *se comunique* a la su ánima devota,** [4] abrazándola en su amor y alabanza y disponiéndola por la vía que mejor podrá servirle adelante. | [3] だが、霊操中によりふさわしくより良いのは、神のみ旨を探し求める際に、**創造主自身が、敬虔な魂に自らを伝え、**[4] その愛と賛美へと抱き、今後神により良く奉仕することのできる道へと整えさせることである。 |

→霊操の方法:「イエス・キリストの姿」を媒介とする神と霊操者との間の物語的コミュニケーション

| ヨハ14・9 | |
|---|---|
| ὁ ἑωρακὼς ἐμὲ ἑώρακεν τὸν πατέρα· | わたしを見た者は、父を見たのだ。 |

## 2 右近の霊操体験

※右近の列福調査報告書(*Positio super martyrio*)

CONGREGATIO DE CAUSIS SANCTORUM, *Tokiensis Beatificationis seu declarationis martyrii servi Dei Iusti Takayama Ukon viri laici in odium fidei, uti fertur, interfecti († 3 februarii 1615). Positio super martyrio*, Roma 2015.

0)右近の霊操で用いられた霊操書:霊操の適用テキスト(?)

※『スピリツアル修行(*Spiritval xvgvio*)』(1607)

『スピリツアル修行』(キリシタン文学双書・キリシタン研究31輯)、海老沢有道編著、教文館、1994年。

①「オラシヨ　ペレパラトウリイヤ(Oracio Preparatoria)」、「ペレアンブロ(Preambulo)」

②「ポントス(Pontos)」「メヂタサン(Meditaçam)」

③「コロキヨ(Colloquio)」、「パアテル　ノウステル(Pater Noster)」

1)1588年(天正16年):有家・イエズス会修練院

※秀吉の禁令(1587・06・19)

| G・コエリョ「1588年度年報」(1589・02・24) | |
|---|---|
| E depois detreminou recolher-se **por algunas dias** no noviciado que estava então em Arie, e tomar os **exercicios spirituais**, e fazer huma confição geral descansadamente, e aparelhar se para tudo o que se podia acontecer. (*Positio*, p. 105) | やがて彼は**数日間**、当時有家にあった修練院に籠ることを決意した。**心霊修業**を行ない、心安らかに総告白をして、生じうるすべてのことへの準備を固めるのがその意図するところであった。(p. 36) |

※ガスパル・コエリョ(Gaspar Coelho)(ca. 1530–90):「1588年度年報」

松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集　第Ⅰ期第1巻』日埜博司訳、同朋舎、1987年、pp. 3–93:1588年度年報(フーベルト・チースリク『高山右近史話』[聖母文庫]、聖母の騎士社、1995年)。

2)1614年(慶長19年):長崎・諸聖人(トードス・オス・サントス)修道院

※家康の禁令(1613・12・23)

| P・モレホン「高山右近伝」(1615) |
|---|
| ドン・ジュストは、大いなる信心を以て、**心霊修業**、ならびに二度目の総告白をし、大いに感動し、いたく涙を流したので、あたかも修道士のやうに見えた。(p. 286f.) |

※ペドロ・モレホン(Pedro Morejón)(1562–1639):「高山右近伝」(「1615年イエズス会年報」)

ヨハネス・ラウレス『高山右近の研究と資料』Ⅱ、六興出版社、1949年、pp. 255–292:「第五章　高山右近未完追悼の辭」。

→右近の行った霊操:簡略化された霊操(×四週霊操)

| 完全霊操(霊操 20・1) | |
|---|---|
| LA VIGÉSIMA. Al que es más desembarazado y que en todo lo posible desea aprovechar, dénsele **todos los ejercicios espirituales**, por la misma orden que proceden; | 第二十。より妨げがなく、できるだけすべてのことにおいて益となることを望む者には、霊操の進む同じ順序で、**すべての霊操**を与える。 |
| **第一週霊操(霊操 18・8–11)** | |
| [8] Ansimesmo, si el que da los ejercicios viere al que los recibe ser de poco subyecto o de poca capacidad natural, de quien no se espera mucho fruto; [9] más conveniente es darle algunos destos **ejercicios leves**, hasta que se confiese de sus pecados; [10] y después, dándole algunos exámines de conciencia y orden de confesar más a menudo que solía, para se conservar en lo que ha ganado, [11] no proceder adelante en materias de elección, ni en otros algunos ejercicios, que están fuera de **la primera semana**; | [8] 同様に、霊操を与える者が、霊操を受ける者が資質や自然的な能力があまりなく、多くの実りを期待できないとみなされるならば、[9] 罪の告白をするくらいのところまで、この**簡単な霊操**のいくつかを与えるのがより適切である。[10] その後、得たものを保つために、いくつかの意識の究明と普段よりは頻繁に告白するやり方をしめし、[11] 選定の題材にも、**第一週**外の他のいかなる霊操にも進ませないことである。 |

## 3 右近の生涯と霊操の精神

### 3・1 「キリストの騎士」—右近とイグナチオの類似と差異

1)右近(ca. 1552–1615):「キリストの騎士(cavaleiro de Christo)」

a)ルイス・フロイス(Luis Fróis)(1532–1597):『日本史』

LUÍS FRÓIS, *Historia de Japam* IV (1583–1587), edição anotada por JOSÉ WICKI, Lisboa: Biblioteca Nacinal, 1983.

ルイス・フロイス『完訳フロイス日本史4　豊臣秀吉篇Ⅰ　秀吉の天下統一と高山右近の追放』(中公文庫)松田毅一／川崎桃太訳、中央公論新社、2000年。

| L. FRÓIS, *Historia de Japam* IV, P. 2ª, C. 54º–1587 | フロイス日本史4　豊臣秀吉篇Ⅰ　第17章 |
|---|---|
| Ucondono, como esforçado capitão e valerozo **cavalleiro de Christo**, respondeo intrepidamente: […] (p. 409) | **キリストの**勇敢な司令官であり**騎士**である右近殿は臆することなく次のように答えた。(p. 221) |

b)ガスパル・コエリョ(Gaspar Coelho)(ca. 1530–90):「1588年度年報」

| G・コエリョ「1588年度年報」(1589・02・24) |
|---|
| 勇敢な**イエズス・キリストの騎士**ユストは、準管区長およびすべての神父たちを訪ねた。(チースリク、p. 230) |

2)イグナチオ・デ・ロヨラ(1491–1556)

※『自叙伝(*Autobiografía*)』

*El peregrino. Autobiografía de San Ignacio de Loyola*, Introducción, notas y comentario por Josep M.ª Rambla Blanch, S. I., Bilbao-Santander 1983.

イグナチオ・デ・ロヨラ『ロヨラの巡礼者—聖イグナチオ自叙伝』アントニオ・エバンヘリスタ／佐々木孝訳、中央出版社、1980年。

a)青年騎士

| 自叙伝 1・1 | |
|---|---|
| Hasta los 26 años de su edad fue hombre dado a las vanidades del mundo y principalmente se deleitaba en ejercicio de armas con un grande y vano deseo de ganar honra. | かれは二十六歳のときまで世俗の虚栄におぼれていた。特に、むなしい大きな名誉欲をいだき、武芸に喜びを見出していた。 |

b)挫折と転機:パンプローナ城塞の攻防で負傷(1521・05・20)

| 自叙伝 1・5 | |
|---|---|
| y después de durar un buen rato la batería, le acertó a él una bombarda en una pierna, quebrándosela toda; y porque la pelota pasó por entrambas las piernas, también la otra fue mal herida. | かなりのあいだ攻撃が続いた後、一発の砲弾がかれのはぎに当たった。片足は完全に折れ、弾丸が両足の間を突き抜けたため、他のはぎも重傷を負った。 |

c)キリストの騎士となる儀式(1522・03・24)

| 自叙伝 17・3 | |
|---|---|
| y así se determinó de velar sus armas toda una noche, sin sentarse ni acostarse, mas a ratos en pie y a ratos de rodillas, delante el altar de nuestra Señora de Monserrate, adonde tenía determinado dejar sus vestidos y **vestirse las armas de Cristo**. | そして、モンセラットの聖母の祭壇の前で座ることも横になることもせず、ただ、立ったりひざまずいたりして、自分の武器を前に一夜を明かそうと決心した。そこで今までの服をぬぎ、**キリストの服装と武器を身につける**ことに決めた。 |

### 3・2 右近の生涯にみられる霊操の精神

1)棄教を迫る秀吉に対する右近

| L. FRÓIS, *Historia de Japam* IV, P. 2ª, C. 54º–1587 | フロイス日本史 4 豊臣秀吉篇 I 第 17 章 |
|---|---|
| […], e que quanto ao deixar de ser christão, que elle não trocaria sê-lo nem sua salvação por todo o mundo: pelo que acerca delle e de sua renda e estado fizesse Sua Alteza o que melhor lhe parecesse. (p. 409f.) | 「キリシタンをやめることに関しては、たとえ全世界を与えられようとも致さぬし、自分の霊魂の救済と引き替えることはしない。よって私の身柄、封禄、領地については、殿が気に召すように取り計らわれたい」と。(p. 221) |
| 二つの旗(霊操 136・1) | |
| EL CUARTO DÍA, meditación de **dos banderas**, la una de Cristo, sumo capitán y señor nuestro, la otra de Lucifer, mortal enemigo de nuestra humana natura. | 第四日。**二つの旗**の黙想。一つは、最高指揮官かつわたしたちの主であるキリストの旗。もう一つは、わたしたちの人間的本性の天敵である、ルシフェルの旗。 |

2)秀吉の禁令後の右近

| G・コエリョ「1588 年度年報」(1589・02・24) |
|---|
| 彼(ユスト右近殿)にとってはそのキリシタンの信仰のために、領国を失うことは大したことではなかったように見える。しかしもっと感嘆に値することは、彼が苦難と貧困のともなった追放に耐えた忍耐と快活さである。彼は実にその生命までも、我らの主なるイエズス・キリストのためにささげる確固たる希望のうちに生きているのである。(チースリク、p. 231) |
| 謙遜の第三段階(霊操 167・1–3) |
| LA TERCERA es humildad perfectísima, es a saber, cuando, incluyendo la primera y la segunda, siendo igual alabanza y gloria de la divina majestad, [2]por **imitar y parecer más actualmente a Cristo nuestro Señor**, [3]quiero y elijo más pobreza ***con*** **Cristo pobre** que riqueza, oprobrios ***con*** **Cristo** lleno dellos que honores, | 第三は、最も完全な謙遜である。すなわち、第一のと第二のとを含め、神の賛美と栄光に同じであり、[2] **わたしたちの主キリストに倣い、より実際に似た者となる**ために、[3] **貧しいキリストと共に**、富よりも貧しさを、辱めに満ちた**キリストと共に**、名誉よりも辱めをわたしは望み、選ぶ。 |

→右近の生涯にみられる霊操の精神:「貧しいキリスト(Cristo pobre)」に従うこと(※「選定」の準備)

| 「二つの旗」の第一の対話:聖母との対話(霊操 147・2) | |
|---|---|
| y primero en suma **pobreza espiritual** y, si su divina majestad fuere servido y me quisiere eligir y recibir, no menos en la **pobreza actual**; | そして、第一に最高の**霊的な貧しさ**、またもし神に役に立ち、神がわたしを選び、受け入れることを望まれるならば、**実際の貧しさ**にも。 |

→右近と霊操の精神との親和性(×右近の霊性形成における霊操の排他的影響)

### 3・3 右近の生涯にみられる霊操の精神が問いかけるものとは?

| 2 コリ 12・10:弱さにおける強さ | |
|---|---|
| διὸ εὐδοκῶ ἐν ἀσθενείαις, ἐν ὕβρεσιν, ἐν ἀνάγκαις, ἐν διωγμοῖς καὶ στενοχωρίαις, ὑπὲρ Χριστοῦ· **ὅταν γὰρ ἀσθενῶ, τότε δυνατός εἰμι.** | それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。**なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。** |

# 講 演
# キリシタン時代の霊性

**溝　部　脩**
カトリック高松教区名誉司教
前列聖列福特別委員会委員長

## 序

高山右近の霊性を分かるために、当時の宣教師がどのような養成を受けていたのか、何を基にしてキリスト教を伝えようとしたのかを、まず考えてみたい。次いで、右近にとってイグナチオの霊性はいかなる価値があったかを確かめる。その中で右近が、どのように霊的に成長したかを探る。

キリシタン時代の霊性を理解するためには、15－16世紀のヨーロッパの霊的動向を知る必要がある。当時の宣教師たちは、いずれもその時代の影響を受けているからである。

## 1. 近代の信心運動について

「Devotio moderna」という運動が、14世紀後半から15世紀にかけて、主に北ヨーロッパから起こった。中世が勝利のキリストを主点におくのに対して、人間キリストに焦点を絞った運動であった。玉座に座ったキリストではなく、自分を無にした謙虚なキリストを理想としていた。G.グローテはオランダのデヴェンテルで活躍していたが、彼の弟子ラデヴァイアンは「共住生活兄弟会」（Fratres vitae communis）を創立した。彼らは世間で活動しながらも、一定の規則の下に共同生活を送っていた。この運動の有名な人物が、トーマス・ア・ケンピスであり、彼はデヴェンテルでこの運動に出会った。彼の作と言われるのが「De imitation Christi」である。

時代は人文主義、ルネサンスの時代であり、中世の宗教が形式的、知的傾向にあったのに対して、実践的、体験的、修徳的傾向がその特徴であった。自らの霊魂の中に神を見出すために自己を集中し、黙想する方法を編み出した。神との深い交わりをその軸に据え、その最も勝れた方法は、キリストの生涯を黙想することであった。彼の生涯を黙想し、彼に倣って生きることが強調された。この世の知恵を戒め、この世の栄華の空しさを悟らせた。聖書が読まれ、写本を作成し、霊性を深める運動となった。

観想を深くすることで、自分の信仰を確立することができた。キリシタン時代の宣教は、黙想、観想を大事にすることから宣教という課題に取り組んだ。外面的活動より内的信心を求め、孤独と沈黙の中に、何を自分がしなければならないかを考えた。これは日本人が好んだ霊性でもあった。

北ヨーロッパに始まった運動は、プロテスタントに吸収されていき、聖書を中心にすえた信仰へと発展していった。カトリック側では、むしろイベリア半島で発展することとなった。ﾓﾝｾﾗｯﾄ修道院院長、ベネディクト会員シスネロスが、その代表的人物であり、彼の「霊的生活の修行指南」（Ejerucitorio de la vida spiritual）は、後にイグナチオの「霊操」に受け継がれた。イグナチオの「霊操」は、新しい信心運動の要素を多く受け取った。即ちキリスト中心、聖書の黙想、特に受難の黙想、組織だった連

続の黙想などである。日本に来た宣教師は、いずれもこの新しい信心の影響を濃く受けていた。

日本のキリシタン時代は、黙想を奨励した時代であり、深くキリストと一致する道を探究することを目的とした。教会創設、その発展、ひいては教会の改革の基盤は、信仰者個々人が深くキリストの生き方を追求することに重点を置いたのであった。

## 2.「キリストに倣いて」

A.「キリストに倣いて」は、四巻に分かれている。

第一巻「霊的な生活に有益な忠告」: 神を認識することが真の知恵の始まりであり、そのためには謙虚さが大切。真の知恵はキリストであり、内的生活を深めるために聖書にふれることが大切。

第二巻「内的生活についての忠告」: この世は過ぎ去ること。それに執着してはならないこと。十字架のキリストを見つめる。キリストと一つになること。

第三巻「内的慰めについて」:キリストと対話することで得られる慰めである。「わたしの言葉を聞け」で始まり、「わたしの神よ、わたしの愛よ」で終わる対話である。

第四巻「聖体について」: 聖体の前にしっかりと自分を見つめることを大切にする。

教会再生、刷新の時代を生きた16世紀の改革者たちが、自らに科したのは、神の愛に生きること、即ち神の愛を能動的に観想することにあった。

B. 日本語の翻訳

本書は早くから日本の教会で翻訳され、人々に読まれた、当時のベストセラーであった。日本語の翻訳のことでひとつ留意したいことがある。ローマ字本と国字本の二種類があるが、ローマ字本は原本に忠実な翻訳となっている。これに比べて、後から出版された国字本は、自由に表現したのびのびした文体に変わっていることである。しかも、聖職者向きに書かれた本書を、国字本は一般信徒向けに書き直していることである。ということは、1590年代になると、一般信徒が本書を、自分たちの黙想用の本として用いていたということを意味している。日本教会は、早くから自らを律する修徳に励むことを勧めていたことと連結する。キリシタン時代は、現代のわれわれよりもずっと黙想を大事にした時代といってもよい。高山右近は80年代には、はやこの本を読み、黙想していることは確かである。

## 3. 高山右近と「霊操」

高山右近は、少なくとも二度「霊操」に与っていることは分かっている。一度目は、1587年7月の秀吉の宣教師追放令が出て、小豆島に隠れて後、小西行長が九州に行くに及んで、右近も九州へ行き、「霊操」を受けている。もう一つは、徳川禁教令で金沢を去り、大坂を経て長崎に到り、そこで霊操に与っている。一回目は秀吉により追放されて、金沢に行く前のことであり、二回目は、日本を追放されて、マニラに旅立つ前のことである。二度とも、彼の人生の決定的瞬間にあると言ってもよい。

オルガンティノは小豆島より書簡を送っているが､島にいる間に度々右近と話しあったと述べている。「従って、デウスは、その至聖なる御摂理により、我が自己に沈潜し、心を更新し、デウスがその御慈悲から我らに授け給うた数々の恩恵や賜物に想いを寄せ、はたまた主への奉仕において今まで犯した我らの過ちを反省し、それらを改めて、この聖なる修行に専念することを命じ給うのであります」。これから分かることは、彼らの会話の内容は、今こそしっかりと黙想し、自分をしっかりと見つめ直す必要があるということである。これが右近とオルガンティノの会話の概要である。

「かの寧猛な獅子が、もっぱら狙っているのは、信望愛というわが陣営の神経を冒すことで、その部分を冒すことによって、我らが弱体化し、得たものを奪還することを厭い、その希望をなくし、かくて重要な修行に冷淡になるようにしていることにあります」。これを読む時、イグナチオの「霊操」の二つの陣営の旗という箇所を思い起こす。ルシフェルの陣営とその旗、キリストの陣営とその旗、この後者に属するためには、キリストに従っていく道への識別が必要となる。殉教をさえ覚悟しなければならない状況にあって、今なすべきことは黙想をしっかりとして、事態に立ち迎う心を準備することが求められている。同じことは、長崎にあっての彼についても言えることである。人生の大事に当たって、霊操を行ったのはこの意味であった。霊的修行を通して殉教を準備するのである。

## 4.「スピリツアル修行」

イグナチオの「霊操」、ラテン語版‘Exercitia spiritualia’は、1596年、天草で出版された。これはイエズス会員養成に不可欠な本であり、早くから翻訳の作業にとりかかったのは当然であった。しかし、日本ではその忠実な翻訳というより、イグナチオの考えを基本において、日本に適応した形でかなり自由に翻訳したことに留意する。これは「スピリツアル修行」として出版された。

「スピリツアル修行」は三部に分かれていて、それらは黙想の手引きとなっている。

第一部「ロザリオの十五のミステリオ」: ロザリオの15玄義の黙想書である。ロザリオの祈りというより、キリストの生涯を黙想する方法を教えている本である。

第二部「御パッションのメディタサン」:四福音書からとった受難の物語である。ここでも「レリジョゾ」(聖職者)とあるところを、全て「キリシタン」として、一般信徒向けに書き直している。キリシタン時代、黙想を宣教の在り方として一般信徒にも浸透させていたことを伺わせる。受難物語が、当時の日本人の心をいかに打ったかは、その例に」いとまがない(大友宗麟、曲直瀬道三)。

第三部「ポントスの事」: 種々の黙想が編されてある。

これらをイグナチオの「霊操」と比較して読むと面白い。最初は「考察」(Consideracao)であり、禅の無念無想と異なり、聖書の朗読、知的考察を黙想の基本にすえている。次は、「想像」(Imafinacao, Meditacao)であり、聖書の世界に生きる人々を生き生きと再現する。物語を語ることで、そこに登場する人々との対話に到る。最後は「観想」(Contemplacao)であり、神との無言の対話である。神への呼びかけ、人の応答、又その反対である。

こうして最後に識別、決断に到る。イグナチオの「霊操」の基本は、単に神との恍惚とした一致ではなく、そこから立ち上がって実践に到るところにある。「Grande animo y liberaridad」と呼ばれているものを指す。「大いなる心意気と自由なる裁量」がその基本となる。

右近にとって「霊操」は、これから起こる出来事に対しての大いなる決断の時機となった。自分に降りかかってくる十字架をいかに受け止めるか、どのような人生をこれから選択していくのか、ここにあったと言える。実際、このようにして金沢での祈りの生活が始まり、このようにしてマニラでの最期の日々があったということが理解できる。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障害者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお、点字による複製は著作権法第37条第1項により、いっさい自由である。

ユスト高山右近帰天400周年　記念シンポジウム　講演集

2016年2月3日発行〈非売品〉　ⓒカトリック中央協議会　2016年
企画・監修：日本カトリック司教協議会　列聖推進委員会
発行：　カトリック中央協議会
〒135-8585　東京都江東区潮見2-10-10　日本カトリック会館
電話　03-5632-4445
印刷：　有限会社　プリティック・ウィード

この冊子の一部または全部の一切の無断転載を禁じます。